報告

深島・屋形島研修記

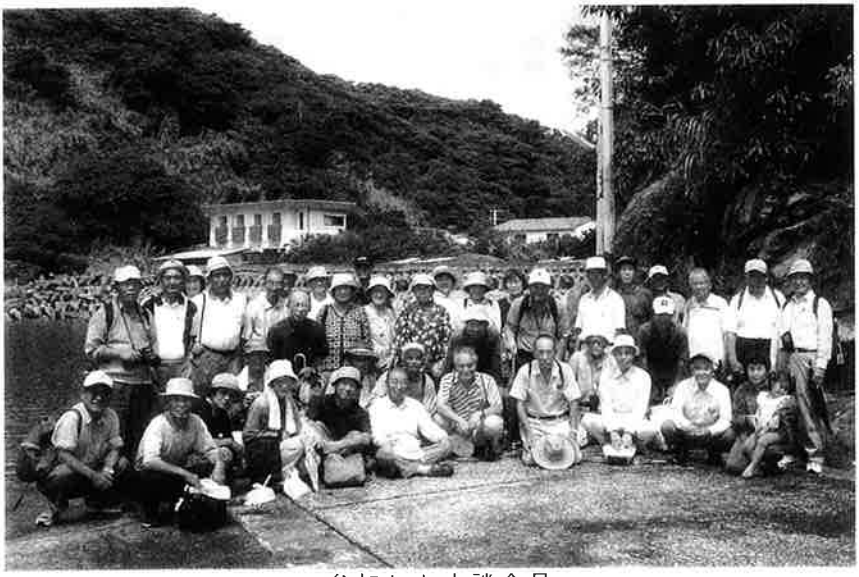
常木　祐一

（会員　鶴見町沖松浦）

今年三回目となる史談会「佐伯湾島巡り研修会」が八月六日、行われた。一昨年の大島（鶴見町）、昨年の大入島（佐伯市）に続き、今年の研修先は深島・屋形島（蒲江町）の両島。江戸時代は佐伯藩の流刑地だった深島を中心に、会員ら四十名が島内に残る歴史的遺物や自然環境などを調査した。

一、両島の概略

深島は蒲江港から南に約九㌔、面積一・一平方㌔、地殻変動で沈降、水没した陸地の山頂部と言われている。島全体を俯瞰すると、南北二つの台地状の島が「はま」と呼ばれる砂州で結ばれており、その砂州のくびれた部分に集落がある。一方、屋形島は蒲江港から同じく南に



参加した史談会員

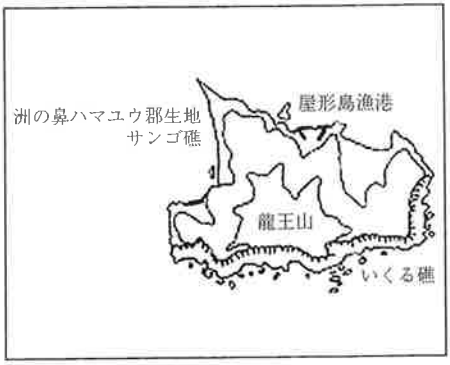
約二㌔、面積は一・二平方㌔と深島とほぼ同じ、島の西側と北側中央部に集落と耕地がある。

両島と蒲江本土を結ぶ公共交通機関は、小型艇「えばあぐりいん」（深島一日三便・屋形島一日五便）が唯一だが、島民の中には持ち船で本土に渡る人も少なくない。また近年、町のケーブルテレビ事業に伴い、平成十四年四月から、十一チャンネルのケーブルテレビ放送が開始された。

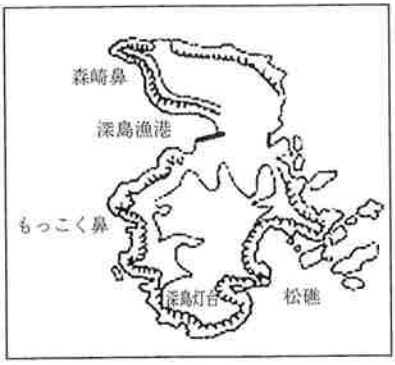
両島とも主な産業は漁業と水産業。深島では一本釣り（タイ・アジ等）、刺し網（クルマエビ・アジ等）などのほか、島の婦人会が特産品「深島みそ」の生産・販売を行っている。また、屋形島では一本釣りや刺し網、定置網のほか、ヒオウギ貝や真珠の養殖なども実施されている。

二、両島の歴史

深島・屋形島が史書上に登場してくるのは江戸中期、十八世紀初頭ごろからとされる。深島では、享保四年（一七一九）、赤木村（現直川村）の百姓四軒、伝十郎・吉郎右衛門・伝四郎・弥次兵衛の四家族十六人が移住し



屋形島の地図



深島の地図

（共に蒲江町観光パンフレットより抜粋）

たと記録に残っている。その後、文化七年（一八一〇）、『大日本沿海輿地全図』の製作者・伊能忠敬が蒲江浦から深島に渡り、同島を調査。忠敬の測量日記には「此嶋は佐伯領の流人嶋にて田畑も少しあり。小屋一軒建置き、当時流人三頭ありと云う」とあり、その頃にはもはや、開墾地というよりも流刑地としての性格を有していた事が分かる。その直後、文化九年（一八一二）、因尾村・横川村・赤木村・仁田原村・上直見村・下直見村・中野村七ヶ村（現本匠村・直川村）の百姓ら約四千人が蜂起、切畑村（現弥生町）まで押し寄せた、佐伯藩政史上に残る百姓一揆が勃発。終息後、一揆を煽動した罪で因尾村上津川の百姓、沢右衛門・甚太郎・左市・助右衛門・半七、そして仁田原村上ノ地同友八の計六人が深島に流刑。今でも島内に残る「因尾谷」との地名、そして流刑者が持ち込んだとも考えられる（『蒲江町史』による）「役の行者」の石像などから、六人の流刑が島に与えた影響の大きさが偲ばれる。

明治期に至ると、明治五年（一八七二）、蒲江浦より松下初蔵一家七人が移住、深島の近代史が幕を開ける。しかし、離島という悪条件、そして塩害等により地味の痩せた土地の開墾は困難を極め、その状況は終戦以降も変わらなかった。その間の事情は、矢野徳弥氏の労作「『清水禎一翁』聞き書き（1）・（2）」（『佐伯史談』176号、同177号）に詳しい。

役の行者像

一方、屋形島では元禄五年（一六九二）、与三右衛門なる百姓が新田弐反ほど開墾したい旨、佐伯藩庁に届け出た事が記録上の初出とされる。その後も開墾は続けられ、寛保三年（一七四三）に深島から屋形島に移住した百姓が拓いた田畑は、藩の検地の結果、四石九斗八升八合と評価された。

一時期設けられた牧場こそ廃止されたが（理由は不明）、寛政五年（一七九三）には屋形島大明神が創建。当浦日記によると「段々、人繁盛に及び屋数も九軒に相成」とあり、翌六年には島で小引網の操業が許可されるなど、流刑地とされた深島とは対照的に、小農漁村としての開発が進んでいた事が分かる。

三、両島の将来

そして明治を経て戦後に至ると、深島・屋形島は国の離島振興法に基づき、昭和三二年、「離島振興対策実施地域」に指定された。その結果、港湾設備・小中学校・集会所など公共施設の整備が進み、電気・電話・水道等の生活インフラも改善されてきた。蒲江町まちづくり推進課によると、今後は「島という新鮮味を活かして、ブルーツーリズムの振興を図り、交流人口の増加に取り組みたい」とする。

生徒数減少を象徴… 1人で遊べるよう工夫されたシーソー
（蒲江小学校深島分校校庭にて）

また、地場産業の育成として、深島では現在蒲江浦に計画中の町物産館（まちの駅）と連動させる形で、特産品「深島みそ」の販路拡大、生産意欲の向上を図り、屋形島では蒲江湾に適合した真珠養殖用アコヤ貝の開発・育成に取り組むとしている。

確かに深島は、大分県で唯一サンゴ礁のある島として、その豊かな自然を高く評価する向きは多い。しかし一方で、両島を襲う「過疎高齢化」の急激な進行は、もはや島での生活を実質不可能にしつつある。最盛期には深島だけでも二百人以上の島民がいたが、今では深島十三世帯三十一人、屋形島十五世帯四十九人（共に平成十六年七月末現在）。それも高齢者の一人暮らしが主で、次世代を担う子供たちはほぼ皆無。生徒数の減少で深島中学校は平成六年四月に、蒲江小学校深島分校は同十六年四月に休校している。

経済的理由により、また生活上の利便性を求めて人々が島を後にする事は、全ての富が中央―都市に集められていく現在の経済システム、また田舎においても都市同様、物質的に豊かで快適な生活を志向する現代社会の風潮においては、もはや不可避な事かもしれない。しかし、江戸期以降、特に終戦後、塩害で赤茶けた土地を目の当たりにしてもなお、島での生活を決意した清水翁ら島民たちの苦闘の歴史を省みると、一歴史学徒として寂寥（せきりょう）の念を禁じえない。